

にいかした

北から南から



会議は踊る

長崎 明

民主主義は会議によって物事を決めることが基本とされる。ところが我が国の民主主義は、数百年の歴史をけみしたヨーロッパと違って、敗戦という大きな代償を払ったとはいえ、いきなり憲法で決められたので五十年たった今日でも、いまだに様になっていない。一人一人の個人がおのれを取り巻く社会の中で自身の果たすべき役割を認識したうえで自己主張をすることが身についていない。

だから、長時間にわたる討論を重ねたにもかかわらず、なかなか結論が出なかったり、仮りにある結論を得たにしても、必ずしも参加者の意見がまとめられたとは言にくいこ

とが少なくない。現時点では、会議をまとめるのは司会者（チエーマン）の采配によるところが大きいのは否めない。時によると参加者の意見とは全く異なる結論にまとめられてしまうことさえある。会議が終わってから、ああだの、こうだのと初めて忌憚のない意見が語り合われて、本当の会議はそこから始まるようなこともある。

いわゆる戦後民主主義といわれた頃、大人達は職場や組合運動の中で、子ども達は小・中学校の教育の中で、話し合いで物事を決めていく訓練が盛んになされたものだった。もはや戦後ではないといわれ、経済大国を目指しての自由競争こそが最良の社会的規範と称せられるに至って、会議は話し合いの場ではなくなった。トップダウンの形で結論を押し付ける場になってしまった。つまるところ会議は「形式的なもの」・「つまらないもの」の代表になってしまった。かくて、しばしば「会議は踊る」わけである。

実（み）のある会議にするにはどうしたら

良いのだろうか。特別にノーハウがあるわけではなからう。私はお互いの人間性を認め合うことが大切だと思う。よく聞き合い、よく話し合うことである。とりわけ聞き合うことが肝要だと思う。特に司会者は然りである。

相手の話を良く聞いていると、その人の人間性がにじみ出てくるのが分かる。私の話も相手にそのように聞かれてほしい。そこから「阿吽（あうん）の呼吸」を生じ、「呼吸が合う」に至る。相撲では阿吽の呼吸が合えば仕切り時間前でも立ち上がることができる。

実はこれが弁証法の原理なのである。異なる二つの見解、テーゼとアンチテーゼとが相互の矛盾や対立の否定のうえに、より高次の段階で統一（止揚、アウフヘーベン）すること。会議の参加者一人一人がお互いに意見を述べ合い、より高次の段階で止揚できれば、それこそが立派な会議の成果ということになる。会議は睡らなくてすむのである。

（ながさきあきら＝県民教育研究所理事長）

土いじり

土田 光男

わが敬愛してやまない藤沢周平言うところの「残日録」の三屋清左エ門ほどの年齢になった。この三月に三十八年間勤めた小学校の教員から解き放たれたのである。「日残りテ昏ルニ未ダ遠シ」というところである。

魚沼のこの冬は少雪で、四月の中頃にはもう雪はなかったが、退職したらとひとそかに決意していた畑仕事には未だ早く、山菜とりと読書三昧の日々は、教員生活が忙しかっただけに、ちょっととした至福の時間であった。しかし、油断して遊びほうけているうちに、いつの間にか、畑はわらびの繁茂するところとなった。ススキさえ生え出していない